

ギャスケルの作品にみる女性の救済

矢嶋 瑠 莉

序

Elizabeth Gaskell の作品には、fallen woman や、今にも fallen woman となりそうな若い女性が多く登場する。彼女たちの墮落の要因は様々であるが、いくつかの作品に共通するのは、例えば *Mary Barton* (1848) の Esther のように、彼女自身の道徳心や信仰心の欠如が挙げられる。しかし、主人公の Mary のように、墮落する前にその性質を道徳的に矯正することができれば、彼女は fallen woman となるのを免れ、さらに結婚という幸せな未来を手にすることができる。

ここで注目するのは、墮落の一步手前にいる主人公は、独力で自分自身の性質を変えることはできないが、彼女にとって模範的な道徳観を持ち、深い信仰心を持つ周りの登場人物による助力と導きがあれば、その墮落した精神は矯正され、fallen woman となるのを未然に防ぐことに成功する部分である。彼女の周りの救済者は、時に二人以上で連携や協力を行うが、その方法は一様ではなく、作品ごとに違いがある。また、Gaskell の作品における道を誤りそうな女性と、その道徳の矯正による救済方法は、当時の社会問題であった売春と、労働者階級の女性の置かれた転落しやすい立場、また身体の墮落＝精神の墮落という見方との関連性だけではなく、Judith R Walkowitz が著作 *Prostitution and Victorian Society: Women, Class, and the State* に記した、当時の墮落しやすい女性に見られる特徴的な性質や、性病施設での更生プログラムの内容との共通点が挙げられる。

本論では、“The Well of Pen-Morfa” (1850)、“Bessy’s Troubles at Home” (1852)、*Mary Barton* の3作品を取り上げ、主人公の周りの登場人物に注目しながら、彼らによる主人公の救済およびその連携・協力の方法の差異を分析する。救済者たちは主人公にどのような影響を与え、またこのような女性の救済には、どのような作者の意図やメッセージが込められているのだろうか。

1 fallen woman と労働者階級の女性

一般的には、fallen woman となった女性の多くは労働者階級であり、貧困に耐えきれずに売春婦となった者が大半だったとされる。当時の女性が就ける職業には限りがあり、お針子は激務の割には低賃金で、足りない稼ぎを補うために売春を行う者も多かった。一方、女工の給料は比較的良かったが、男性と同じ職場で働くために軽率な交際や誘惑がしばしば墮落の引き金となった。彼女たちの墮落は、貧困の度合いよりも個人の持つ道徳観にかかっていたといえる場合もあるが、労働者階級の特に貧しい家庭では、親は一日中仕事に追われて娘への道徳教育や支配が行き届かず、また孤児の場合は道徳を教わる機会がなく、無知なまま安易に売春の道に入り不幸になる少女が多かった。Gaskell が 1850 年に New Bayley の刑務所訪問で出会った売春婦の少女 Pasley¹ も、そうした不幸な境遇の犠牲者である。“Lizzie Leigh” (1850) のように、奉公で都会にきた田舎育ちの無垢な少女が騙されるケースも、単身で両親の目の行き届かない都会に働きに出て、適切な判断や自己防衛ができないうちに誘惑に堕ちた不幸な状況といえる。

一度 fallen woman となった女性は家を追い出され、売春業以外に生計を立てられる手段は少なかった。その理由は “It [Prostitution] paid better than stitching and might even offer a chance for social advancement to lower-class women. . . . In the eyes of the Victorian public, however, prostitution was worse than death” (Helsing 150) とあるように、売春婦は当時の社会悪として捉えられ、ふしだらで更生の余地がないという社会の認識が、その墮落した生活から抜け出すことを一層困難にしていたためだといえる。

また Walkowitz は、19 世紀後半から 20 世紀初頭の労働者階級の家庭での女性の立場の低さが fallen woman を生み出す要因になったとし、次のように指摘する。

It is important to consider the absolute level of subordination and acquiescence required of working-class girls. This condition of dependency and self-effacement was the normal behavior expected of them in their work situation as well as at home, but it was the family that functioned as the principal socializing agency in this regard.

In the late nineteenth and early twentieth centuries, girls were taken out of school to care for the younger children when mothers had to go out to work; they were given

less free time at home than their brothers; they had less choice about their occupation; they were fed worse than their brothers, not to speak of their fathers. (Walkowitz 20)

ここで取り上げる3作品は1850年前後に執筆されており、*Mary Barton*の舞台はここで指摘される時期より少し遡るために、この見解が当てはまるかどうかの判断は難しく、また“The Well of Pen-Morfa”のNestは母子家庭のため、この見解は当てはまらない。しかし、“Bessy’s Troubles at Home”では、父親不在の家で兄達が権威を持ち、家事やきょうだいの世話が不得手なBessyが自活欲求を抱いていることから、こうした労働者階級の女性の家庭内での立場とそれによる墮落の危険性は、Gaskellの作品の中にも描き出されていると言えるだろう。

2 Gaskellのfallen womanの救済

Gaskellが*Ruth* (1853)などで用いたfallen womanの改心とそれに対する赦しという展開の根本には、当時の身体の墮落＝精神の墮落という考え方が関係している。身体の墮落した女性を救う手段に、その精神（道徳や信仰）の墮落の矯正を行うというのは、一見強引なやり方にも見えるが、これは当時の性病施設での更生プログラムの内容とも共通する。例えば、マンチェスターの性病施設では1850年頃から、性病施設の女性患者に施設内で針仕事や洗濯の仕事の職業訓練を行い、彼女たちの品行を正し、売春以外の職業で身を立てることを教えている。

By the 1850s, lock hospitals began to give more publicity to their moral reform efforts than to their medical functions. . . . A lock asylum had been connected to the London Lock Hospital since 1787. A similar auxiliary institution was established by the Ladies Committee of the Manchester and Salford Lock Hospital in 1822. Like other “penitents,” inmates of the lock asylum were subjected to a rigorous probationary period of three months. They were subsequently trained as servants, laundrywomen, and needlewomen because training in “habits of industry and forethought” were the first steps to “recovery of self-respect and social position.” (Walkowitz 61-62)

結果的にこの方法は、売春婦の減少や性病の抑制に繋がらなかったが、こうした道徳の観点から女性を矯正し更生させるというやり方は、Gaskell の作品における fallen woman に対する救済の方法と同じである。その理由は、この更生プログラム自体が元々、1840 年代から福音主義の牧師・宗教関係者と医者によって大々的に行われた売春の研究と性病の抑止策の考案に起因することや、1850 年代に起こる福音主義主導の娼婦救済運動であるマグダレニズムの影響が挙げられる。

また、彼女の属するユニタリアンの教えも作品に影響を与えており、その大まかな特徴は“Unitarian believed in the personal unity of God, that is, in God as one person only, and this led to their rejection of the Trinity. . . . They did not believe in eternal punishment, the personality of the devil, nor in fallen spirits, and their services and sermons were based on rational rather than emotive thought” (Snell & Ell 114-115) である。また彼らの慈善の重視は、Felicia Bonaparte の言葉を借りるならば、

Good works have always been a part of the Judeo-Christian tradition, and it is true that the Unitarians, holding that God could only achieve his plan for the world through human agents, gave them a special place in their scheme. Works of charity were, moreover, just the practical turn Unitarians liked to give to their religion . . . every fallen woman in Gaskell atones for her sin in this same way. (Bonaparte 133)

となり、Gaskell が *Ruth* で描いたような、墮落した女性の罪を慈善によって贖うという発想はユニテリアンの慈善の体現と言える。また道徳や宗教によって女性の精神の墮落の矯正を行うという作者の救済の方法は、それが fallen woman でも、将来 fallen woman になりそうな女性であっても大きな違いは見られない。

3 Gaskell の 3 作品における救済の考察

各作品の考察に入る前に、序章で述べた当時の墮落した女性に見られる特質と、これらの 3 作品に登場するそれぞれの主人公の性質との類似点を考察する。Walkowitz は、当時の墮落しやすい女性に見られる特質を次のように記載する。“According to rescue workers and others, a wild impulsive nature, a restlessness, and a desire for independence frequently characterized the young women who moved

into prostitution” (20). これらを3作品の主人公の性格と合わせて考察すると、激しい衝動的な性格の Nest、変化を求める落ち着きのない Mary と Bessy、そして自活欲求の高い Bessy となり、道を誤りそうなそれぞれの主人公の性質と一致する。また、彼女たちの美しさも墮落の予兆となる災いの特性として描かれている。例えば、*Mary Barton* の Mary は、彼女の叔母の Esther と同様に美人だが、そのために虚栄心があり、思慮に欠けている。“the mysterious aunt Esther, had an unacknowledged influence over Mary” (26) の部分は、彼女が叔母から fallen woman となりそうな性質を受け継いだことを表し、彼女にとって Esther は “fuctions as a mother for Mary, and the madonna/ magdalen double is united” (Stoneman 79) に示されるように母親と娼婦という両極端な性質を持つ存在である。年頃の Mary は美しさを鼻にかけて、玉の輿願望を抱くが、語り手はこうした彼女の内面の浅はかさを “Yes! Mary was ambitious, and did not favour Mr. Carson the less because he was rich and a gentleman. The old leaven, infused years ago by her aunt Esther, fermented in her little bosom, and perhaps all the more . . .” (90) と指摘する。“The Well of Pen-Morfa” の Nest も “Nest knew she was beautiful, and delighted in it” (245) とあるように美人で高慢な性質である。彼女のうぬ惚れは周囲の反感を招き、“Her high spirits made some few shake their heads, and some called her a flirt and a coquette” (246) に見られるように、美貌への妬みと相まって、軽率な女だと陰口を叩かれる。母親の Eleanor は調子に乗る娘をたしなめるが、母親の心配をよそに本人はそうした周りの評判を気にとめず、改めようもしない。“Her mother sometimes checked her in her happy pride . . . the beautiful, beaming Nest could be decided and saucy enough; and so they revenged themselves by calling her a flirt. Her mother heard it, and sighed; but Nest only laughed” (245-246). また “Bessy’s Troubles at Home” の Bessy は、先の二人ほどには美人であることは強調されていないが、彼女の “I wish I was a boy and could earn money. I wish mother would have let me go to work in the factory” (522) という言葉からわかるように、より自由にお金を使えるように、家を出て女工になりたいという自活欲求を持つ。そのため、もし彼女が女工になった場合は、*Mary Barton* の Esther と同じ道をたどる可能性もある。

ここから、各3作品における主人公の救済を考察する。周りの救済者たちはどのように連携や協力を行って彼女の墮落を防ぎ、彼女はどのように変わるのか。

1) “The Well of Pen-Morfa” からの考察

Nest は実際には fallen woman ではないが、岩からの転落やそれに伴う下半身の不随は墮落の見立てと捉えられており、Bonaparte は、この転落は Gaskell が堕ちた女性のイメージを重ねて意図的に描いたという見解を示す。

Nest, the heroine, being Welsh, is a daemonic, passionate woman and her consuming love for a man who has little concern for her seems to be heading her for a fall. Thus she is a falling woman. But, instead of letting her fall, Gaskell provides a “treacherous rock” that trips her one day when she goes to the well . . . and makes her fall literally instead. (Bonaparte 125)

年頃の娘が岩からの転落 (“fell”) によって下半身が不自由になり、婚約も破談となるという展開は、道を誤った不幸な女性の姿と重なるが、ここで、男性との性的関係ではなく、岩からの転落をその見立てとして用いた作者の意図を考察したい。Nest の岩からの転落の直接の原因は、自分自身の美貌に対する虚栄心に加え、恋愛に舞い上がり母親の忠告をきちんと聞かなかった部分にある。この作品は2章立てだが、物語の後半（第2章）は、主として Nest が困難から立ちあがり、深い信仰と博愛精神による生き方を実践する淑女となるまでが描かれている。そのため、この作品における作者の第一の目的は、主人公の墮落ではなく道徳や信仰による更生とその成功にある。従って、転落事故とそれに伴う下半身の障害は fallen woman の隠喩というよりも、第2章で彼女が道徳的な人間に成長する上で、忍耐力や不屈の精神を学ぶために必要な身体上の試練 (handicap) として課された意味合いが強い。転落事故の日、Nest は恋人と会った後で浮足立ち、母親の忠告も聞かず、水汲みに不釣り合いの着飾った格好で向かうが、彼女の得意な水汲みで大怪我を負うという点でも、彼女の転落事故には、虚栄心や高慢といった精神の墮落に対する自業自得の意味合いが込められているといえる。

この作品における主人公の救済者は、Eleanor と牧師の David Hughes である。まず Eleanor が、彼女の身体の回復を助けながらその自立を促し、その死後は Hughes が役割を引き継ぎ、彼女を見守る存在として描かれている。彼らは協力して彼女を救済するが、その理由に Eleanor の力不足が考えられる。彼女は非常

に信心深く我慢強い性格だが、娘への深い愛情がその自制心や信仰をぐらつかせて不安定になる部分があり、彼女が道徳的・宗教的に Nest を正しく導くための絶対的な救済者となるには、今一つ力が及ばない。そこで牧師の Hughes の存在は、客観的な立場から、揺るぎない信仰で主人公の救済を後押しするために必要不可欠となる。

Eleanor は、まず Nest の身体の回復を助けながら自立を促す。彼女は娘に対し、不自由な身体を自覚して Williams との結婚を諦めるよう諭す。Nest は現実逃避から、特に身体に負担のかかりそうな家事を毎日ひたすらこなすことに躍起になる。“She would not allow her mother to spare her anything. Hard work—bodily fatigue—she seemed to crave” (255). これによって Nest の体力は少しずつ回復するが、その精神は未だに歪んだままなので、家の外には出られない。彼女を家に閉じこもらせているのは、“but she shrank from going out of doors . . . she was afraid of their [neighbors’] pity, as being one deserted and cast off” (255-256) にみられるように、昔の美しさに対する奢りや自尊心であり、彼女の精神の完全な矯正には信仰心というさらに強力な後押しが必要になる。Williams の結婚の噂は Nest を絶望に追い込み、落ち込んだ Eleanor は独力で娘を守る限界を感じ、また神に対する不信に陥る。ここで作者は、主人公の救済役を Eleanor から Hughes に交代させ、彼女の亡き後の主人公の救済の手助けをする役割を与えている。

Hughes は、メソジスト派の John Wesley² に救われ改心した過去を持つ。彼は Nest に若い頃の自分の姿を重ね合わせ、宗教的・道徳的な精神に基づく思考や無償の愛の尊さを説き、彼女を救済しようとしたと考えられる。彼は、絶望から床に就いた Eleanor の元を訪れ、次のような言葉で彼女の信仰を呼び戻す。

“Eleanor,” said David, “where you go all things will be made clear, and you will learn to thank God for the end of what now seems grievous and heavy to be borne. . . . God’s times are not our times. . . . In an unknown way, and when no one looked for it, may be, the answer came. . . .” (258)

彼の言葉は、娘の心配で弱り果てた Eleanor の魂を救済し、彼女は再び神を信じ、娘の未来を神に委ねることに決めて穏やかに死を受け入れる。彼が Eleanor に与

えた変化は、“After David Hughes left that day, Eleanor was calm as one already dead, and past mortal strife. Nest was awed by the change” (259) に見られるように、Nest に母親の死期を悟らせ、それまでの自分本位な行動の抑制や反省を促すことに成功する。母親の死後、Nest は愛情を注いでくれた母に取り続けた自身の不遜な態度を後悔し、嘆き悲しむ。Hughes は、天涯孤独となった不安から自暴自棄になる彼女を信仰によって救済するために、次のような言葉で彼女を諭す。

“Nest,” said he, “your love has been the love of youth. . . . Henceforward, you must love like Christ, without thought of self, or wish for return. You must take the sick and the weary to your heart, and love them. That love will lift you up above the storms of the world into God’s own peace. . . . You are powerful enough to trample down your own sorrows into a blessing for others. . . . I see it before you; I see it in the answer to your mother’s prayer.” (260)

このように彼は、Nest の自立を促し、また愛情の見返りを求めずに、他人のために奉仕する生き方を提言する。彼の熱意ある教えと信頼は失意の彼女を奮い立たせ、自立して、宗教的な生き方を実践する人間に生まれ変わることを決心させる。

知恵遅れの Mary の世話は、ユニタリアンの慈善やメソジストの博愛とその実践に基づく、作者から Nest に課された試練である。彼女は Mary の世話を通して、Hughes から教わった崇高な信仰心に基づく宗教的な生き方を体現し、さらに母親（代わり）となる喜びと、慈悲深く評判の良い淑女という称号を獲得することができる。Mary は “the half-witted woman—the poor crazy creature” (261) や “her eyes glare like a wild beast” (261) とあるように、知恵遅れのために発作を起こしては、動物のように暴れる村の厄介者である。彼女を引き取り献身的に世話をする Nest に、以前のような陰口を叩く者は誰もおらず、Mrs. Thomas の “She [Nest] might have had many a decent girl for companion. My own niece, her that is an orphan, would have gone, and been thankful . . .” (261) の言葉からわかるように、彼女が品行方正な評判の良い女性に変わったことがわかる。また Mary の発作が特にひどい日は、“On those days Nest warned the little children who loved to come and play around her that they must not visit the house. The signal was a piece of white linen hung

out of a side window. On those days the sorrowful and sick waited in vain for the sound of Nest's lame approach" (263) に見られるように、Nest は白いリンネルを掲げて、遊びに来る近所の子どもや近隣の人々に家に近寄らないよう合図を出す。ここから、彼女が自己犠牲的で思いやりに満ちた行動が取れるようになったことだけでなく、家に閉じこもらずに周りの人々と日常的に交流を持つようになったことがわかる。また、Nest の大きな変化は、次の Hughes との会話からもわかる。

"You are not afraid, my child?" asked he.

"No," she replied. "She [Mary] is often very good and quiet. When she is not, I can bear it."

"I shall see your face on earth no more," said he. "God bless you!" He went on his way. Not many weeks after, David Hughes was borne to his grave. (263)

このように Mary の世話を通して、辛抱強さと自己犠牲的な考えを持つ女性へと変化した Nest の姿には、救済した Hughes 自身も心を打たれる。また上記の引用の最後にあるように、立ち直った Nest の姿を見届けた彼はその後まもなく亡くなるが、これは彼が彼女の変化を見届けた時点で、彼の主人公に対する救済者としての役割が完了したためだと考えられる。

2) "Bessy's Troubles at Home" からの考察

"Bessy's Troubles at Home" は、牧師 Travers Madge の依頼を受け、*The Sunday School Penny Magazine* (1852) に掲載された。日曜学校のために書かれたこともあり、道徳教育や宗教的な教訓の要素が色濃い作品である。Gaskell はいくつかの作品の末部に作品のテーマや教訓のようなものを記す傾向があり、この作品の末部に記されている "It taught her several lessons, which it is good for every woman to learn, whether she is called upon, as daughter, sister, wife, or mother, to contribute to the happiness of a home" (535) からわかるように、作品のテーマは主人公の道徳の改善と女性らしさの習得である。Bessy にとっての家庭での役割は、兄達のように働いて家計を支えることではなく、家事や家族の世話をすることである。物語の結末で、Bessy は母親の Mrs. Lee や次女の Mary のように家庭的な女性になるが、

作者は彼女の奔放で自己中心的な性質を正し、当時の労働者階級の女性に求められた家庭を守る働き者の女性へと変化させる。彼女の救済者は、次男の **Jem** と医者であり、**Bessy** に忍耐強さや自己犠牲を教え、自活欲求から道を誤る可能性を防ぐ。医者は父親不在の **Lee** 家において、彼らが頼るべき父親代わりの大人の男性として描かれ、母親との約束を守らなかった **Bessy** を厳しく叱り、その改善に大きな影響を与える。彼らは、道徳を矯正する医者に対して **Jem** がその役割を補強する形で協力を行い、**Bessy** が彼女の手本となる家庭的な **Mary** のように、忍耐強さや自己犠牲の精神を持ち、家庭を守る良き女性に変わるように導く。

家事を行い、上手く家族をまとめることができる **Mary** は、労働者階級の家庭における理想の女性像であり、**Bessy** が目指すべき手本の姿として描かれている。**Jem** は **Mary** の家庭的な性質を評価し、家族を上手くまとめられない **Bessy** に対しては “I know what mother would like as well as you, and I’m not going to be preached to by a girl . . .” (519) と馬鹿にするが、夕食作りの手際の悪さを **Tom** になじられた **Mary** には “Never mind, Mary! you and I will live together, old maid and old bachelor” (529) とその努力を評価して庇う。**Jem** は長男の **Tom** よりも家族に目を配り、**Bessy** の思慮に欠ける言動を度々指摘する。しかし **Bessy** が改心しようとする、頭ごなしに怒らずに、分別のある兄として彼女の過ちを優しく諭す。彼の言葉で特に強調されるのは、例えば “Earning money would not make us happy. We have enough, with care and management. If you were to have made us happy, you should have been at home, with a bright face, ready to welcome us; don’t you think so, dear Bessy?” (533) に見られるように、**Bessy** に与えられた領域は家庭にあるという主張である。これは彼女を家庭に留まらせてその墮落の可能性を防ぐだけでなく、当時の労働者階級に求められた女性の立場を彼女に認識させ、家庭的な女性になるように誘導していると言える。彼の説教は **Bessy** に彼女自身の家庭での役割や立場を認識させ、思いやりや自己犠牲の精神の大切さを学んだ彼女は、**Mary** に献身的な看護を施す。また、この看護の仕事は **Ruth** と同様に、罪の贖いとして作者が主人公に課した慈善行為である。

また、**Jem** は医者の子権を補強する役割を果たしている。**Bessy** は、**Mary** の大火傷に対する自責の念からその看護を申し出るが、**Jem** は自分たちの判断だけではなく、専門家の医者意見に意見を聞くことが必要だとして、彼女の意見を一旦保

留にする。そして彼は、Bessy が父親代わりの大人の男性である医者 of 意見を素直に聞くように導くため、医者に対する全面的な信頼や尊敬を表しながら、その意見に従うことの正しさを次のように説く。“My dear Bessy, we both want Mary to get better, don't we? I am sure we do. And we want to take the best way of making her so. . . . I think we must not be considering what we should like best just for ourselves, but what people, who know as well as doctors do, say is the right way . . .” (531-532). 彼の言葉で、彼女が年長者からの意見を聞き入れる準備ができたところで、医者は家事を放り出して家庭の混乱を招いた Bessy を厳しく叱り、自分の立場をわきまえ他人への配慮ができるような考えができるよう、次のような言葉を Bessy に掛ける。“I'll tell you what; never you neglect the work clearly laid out for you by either God or man, to go making work for yourself, according to your own fancies. God knows what you are most fit for. Do that. And then wait; if you don't see your next duty clearly . . .” (534-535). この医者の叱責をきっかけに Bessy は心を入れ替え、“It was a struggle between her and Mary which could be the least selfish, and do the duties nearest to them with the most faithfulness and zeal” (535) に見られるように、結果的には彼女の手本である Mary と互角なほどまでに変化を遂げる。

3) *Mary Barton* からの考察

Mary は fallen woman にはなることは免れたものの、彼女の浅はかな性質が災いし、痴情のもつれから Jem と Harry の二人の男性を不幸に追い込んだ尻軽女と噂されて窮地に立たされる。Mary は彼女に欠ける聡明さや思慮深さを学ぶことで、Esther のように fallen woman になる可能性を払拭し、移住先での Jem との幸せな結婚生活を手に入れることが可能になる。

この作品において、主人公の Mary の墮落を未然に防ぐ役割を果たすと考えられる救済者は数人いるが、本稿では特に Margaret と Alice に注目する。二人は、Mary が目指すべき理想の女性像、そして博愛に満ちた敬虔なキリスト教徒の象徴として、彼女が道徳的で家庭的な女性に生まれ変わる手助けを行う。

親友の Margaret は、Mary と同じく労働者階級の年頃の女性だが、Mary とは対象的に、地味で思慮深く道徳的な性質である。そのため “Margaret had no sympathy with the temptations to which loveliness, vanity, ambition, or the desire of

being admired, exposes so many; no sympathy with flirting girls, in short” (289) のように節操のない女性には激しい嫌悪感を示し、Mary と Harry の浮ついた恋愛関係を知った彼女は、Mary を許すことができず侮蔑を露わにする。しかし、親友である彼女の手厳しい態度は、Mary の自らの軽率な行為に対する反省を促す。“Mary shrank as if from a cold blast—shrank from Margaret! The blind girl, with her reserve, her silence, seemed to be a severe judge. . . . Mary knew herself to blame; felt her errors in every fibre of her heart . . .” (300). このように、浮ついた女性に対する彼女の手厳しい態度は、Mary の改心に大きな影響を与える。また、彼女は単に厳しいだけではなく、改心しようと努力する Mary の姿を冷静に捉え、彼女の浮ついた過去の恋を許して協力しようとする良さがある。物語の語り手が Margaret を、“Margaret had the great charm of possessing good strong common sense. . . . It is so pleasant to have a friend who possesses the power of setting a difficult question in a clear light; whose judgment can tell what is best to be done . . .” (45) と書いているように、常識的で聡明な彼女は Mary を正しい道に教え導く貴重な存在であり、主人公の手本となる理想の女性像と言える。

Alice は博愛の精神を持つ老齢の女性で、Mary との関係は、“Mary and Alice had always liked each other; indeed, Alice looked with particular interest on the motherless girl, the daughter of her whose forgiving kiss had comforted her in many sleepless hours” (29-30) に見られるように、Mary にとっての母親代わりの存在である。Alice は貧しい病気の人に分け与えるための薬草を部屋で育てており、彼女の物の考え方や振る舞いには、常にその信仰の深さや博愛の精神が滲み出ている。Alice は物語の中盤で病に倒れ、昏睡状態に陥る。Mary はお針子仲間からの陰口に耐えながら、病に臥せる Alice とその病室の安らかな空間を思い出し、そこから連動するように亡くなった母親と聖書のことを思い出す。“She longed for the peace of Alice’s sick-room . . . longing for peace and kindness, for the images of rest and beauty. . . . Old texts from the Bible, that her mother used to read (or rather spell out) aloud in the days of childhood, came up to her memory” (254). このように Alice の部屋は Mary にとっての心の避難所であり、彼女を通して思い出す “mother” と “Bible” は、Mary を墮落から守り、道徳的に正しく導くものの象徴である。Alice は、Mary に必要な墮落からの保護や道徳と信仰を連想させ、病に臥してもなお、彼女に安らぎを与える

ことのできる尊い存在だといえる。

また、Margaret と Alice の道徳観は非常に近く、例えば Margaret の “‘Ay, dear: being patient is the hardest work we, any on us, have to go through life, I take it. Waiting is far more difficult than doing . . .’” (164) という言葉は、Alice の “‘Half our life’s spent in waiting . . .’” (168) という言葉と呼応する。二人とも同じ “waiting” という言葉を、待つことや忍耐強さの教訓として大切に捉えており、浅はかで衝動的な Mary は二人からその言葉の重要性を学び取る。彼女の死後も Margaret は Mary を助け、結婚後の幸福な姿を見届けることから、二人の救済者は道徳や信仰において共通の価値観を持ち、協力し合いながら主人公を救済していると言える。

結論

Gaskell の作品には fallen woman とその救済をテーマとした作品が多いが、“The Well of Pen-Morfa”、“Bessy’s Troubles at Homes”、*Mary Barton* では、それぞれの道を踏み外しやすい性質を持つ労働者階級の女性を主人公として、当時の性病施設でも行われていたような、道徳的な導きによる救済の試みが行われている。このような救済を通して作者は、年頃の女性が転落することなく家庭的な女性になるためには、その道徳観や信仰心の点で優れた人物や、彼女の手本となるような人物が協力し合って教え導くことの重要性を説いているのではないだろうか。作者はこれらの3作品において、具体的にどのようにしたらその転落の防止が可能になるかを、家庭劇の中でリアルに描き出すことに成功したと言えるだろう。

注

本稿は第 25 回日本 Gaskell 協会例会（2013 年 6 月 1 日、於早稲田大学）における発表に、全面的に加筆、修正を施したものである。

1 Gaskell が Dickens に宛てた書簡 *The Letters of Mrs. Gaskell* の pp.98-100 を参照。

2 John Wesley (1703-1791) とメソジストについては *Victorian Religion: Faith and Life in Britain* の pp.34-36 を参照。

引用文献

- Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. Virginia: UP of Virginia, 1992.
- Gaskell, Elizabeth. "Bessy's Troubles at Home." *The Works of Mrs. Gaskell*. Ed. A. W. Ward. Vol.3. New York: Ams, 1972.
- . *Mary Barton: A Tale of Manchester Life. The Works of Mrs. Gaskell*. Ed. A.W. Ward. Vol. 1. New York: Ams, 1972.
- . "The Well of Pen-Morfa." *The Works of Mrs. Gaskell*. Ed. A. W. Ward. Vol. 2. New York: Ams, 1972.
- Heltinger, Elizabeth K., Robin Lauterbach Sheets and William Veeder. *The Woman Question: Society and Literature in Britain and America, 1837-1883*. Vol.2. Chicago: U of Chicago P, 1983.
- Chapple, J. A. V., and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 1966.
- Melnyk, Julie. *Victorian Religion: Faith and Life in Britain*. Connecticut: Praeger, 2008.
- Snell, K. D. M., and Paul S. Ell. *Rival Jerusalem: The Geography of Victorian Religion*. 2000. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Sussex: Harvester, 1987.
- Walkowitz, Judith R. *Prostitution and Victorian Society: Women, Class, and the State*. 1980. Cambridge: Cambridge UP, 1988.

(日本女子大学大学院生)

Abstract

**Elizabeth Gaskell's Fiction:
Preventing Women from Becoming Prostitutes**

Ruri YAJIMA

According to commonly accepted critical views, Elizabeth Gaskell's ideas about the rescue of a fallen woman are connected to her Unitarianism and her real experience of two fallen women's rescues. In Gaskell's view, such a woman could recover her reputation by becoming a religious and moral person, like the protagonist of *Ruth* (1853).

Judith R. Walkowitz has researched prostitutes from the late nineteenth to the early twentieth century, drawing attention to the importance of cultural and social factors in shaping their lives. According to her, young prostitutes were characterized by rescue workers as having "a wild impulsive nature, a restlessness, and a desire for independence." And these workers emphasized moral reform. Gaskell also stressed moral reform in her depiction of fallen characters.

In this thesis, I will take up Gaskell's two short stories and a novel: "The Well of Pen-Morfa" (1850), "Bessy's Troubles at Homes" (1852), and *Mary Barton* (1848). In these stories, each protagonist is unable to achieve change by herself, requiring the support, guidance, and protection of the people around her. I will show how they save the protagonist before her destruction and change her into a religious and moral character. This will reveal how Gaskell always sees the issue of the fallen woman as a moral question.